

孝明天皇紀

六十三



帙
天

卷百二十

文久元年

九月十月上

卷百二十一

文久元年

自十月下

至十二月上



孝明天皇紀卷百二十
 文久元年九月八日
 親子内親王の首途及東下の
 日時を定む

實錄御記九月九日甲午
 雲守 伊豫守
 大久保佐渡守
 從西辨題文來

和宮御首途日限來月二日
 二十日御等御治定候仍申入候午御世話御覽
 可給候也

九月八日

孝明天皇紀卷百二十

文久元年辛酉九月八日癸巳親子内親王の首途及東下の

日時を定む

實麗卿記九月九日甲午上略戸川播磨守關東留關出

雲守京都町奉行原伊豫守京都町奉行阿部越前守禁裏附

大久保佐渡守和宮御用等來

從頭辨廻文來

和宮御首途日限來月二日卯刻同御發輿同月

二十日卯刻等御治定候仍申入候乍御世話御廻覽

可給候也

同和九月八日名略



同時又來

和宮御首途供奉公卿御方直衣衣袍束帶之中可
被任御所意之旨昨日申入候得共直衣衣袍可爲
御所存旨御治定候仍更申入候也

九月九日

〔尙忠公記〕九月十三日從若狹守到來書取寫

和宮樣當春御下向之筈御治定相成居候處關東御
都合ニ付暫御差延之儀被仰進猶此度御頃合被仰
進候處則被仰進候通早速御治定被仰出關東御都
合モ宜御滿悅被思召候ニ付禁裏へ御内々御進獻
物被遊度思召ニ候處差當リ思召付セラレ候御品

849
1

特別

モ不被爲在候間御手許ヨリ御慰品ニテモ被仰付
候様被遊度右御用途トシテ御金貳千兩御内々被
進候旨年寄共ヨリ申越相廻シ申候間則五百兩入
四箱爲持奉差上候可然御内奏被成下候様仕度奉
願候事

九月

老中書翰寫

和宮樣當春御下向

○中略若狹守書取同文

御金貳千兩御内

内被進候此段關白殿へ御申上可被成候以上

八月十日

松平豐前守

本多美濃守

安藤對馬守

内藤紀伊守

久世大和守

酒井若狹守様

十八日從議奏來狀

和宮御首途來月二日之處可爲三日卯刻被仰出

候此旨預洩達候也

署略名

[按]獻物の事は日に非されども茲に合收寸蓋

老中の署日と所司代の上申と三十餘日の差

あるは御發輿日時_の遷延せしに由る乎

十四日_{己亥}親子内親王修學院に遊ひ尋て賀茂社北野

社に詣て給ふ

[長橋局記]九月十四日和宮々修學院御茶屋へ卯の

半刻より成らせられ_小さるか_{皇居}辻_{東北隅}内_はあな門

へ_は寸き見の_は覽所出來_は内_へ出御成

[實麗卿記]九月十四日己亥寅刻許細雨已後霽卯上

刻參和宮今日修學院御山莊御成供奉之事兼日有

催實梁同上_{狩衣}差_袴供青士五人同時一位_{廣橋}光_成小倉

侍從參上中山亞相依所勞理卯半刻許御出門先是

觀行院内女房能登三仲間三人宮上臈一人其外四

五輩御先廻供奉上臈二人其外五人自餘一如石清

水社御參詣其御路桂御所門前南有栖川宮門前東

富小路家門前北滋野井家門前東京極大路北東枿
形川原順路新田於御休幕須臾居御輿予參上相伺
揚御輿此後予御先廻辰半刻著御于御山莊晝御膳
了上御茶屋御成此次赤山邊御歷覽其後於窮邃軒
御休息此所迄一品被從非藏人同上但御次隣雲亭
次御山へ御成時但暫次被召御船御醫候御棹有御一
獻何レモ拜受其後又隣雲亭御成依御沙汰一品於
御船賜一獻非藏人今日光格天皇女房二人同三仲
仁孝天皇女房二人同三仲幹子麗子實陳壽性院
等被召於隣雲亭數巡又予實梁長季朝臣等吹二曲
越天樂亥斜還御于壽月觀卽催還御中略今度御休幕

不居御輿子刻許還御

廿三日戊申丑刻許雨下巳刻許屬霽今日和宮賀茂
兩社御參詣也而雨下之間如何先爲實梁令參桂御
所雨益下依之御延引被仰出之處雨脚漸止之間今
日御參詣可有樣武家強而願之旨實梁歸來告之中略
御延引之事夫々被觸更被催之間人々多以遲參漸
卯下刻相具依之予爲御先廻先向于下御社巳刻前
令參給於廊門內下御御神拜了於御服所御休息從
一社生花一筒御肴一臺獻上須臾令向上御社給予
又爲御先廻參于上御社午刻許令參給於二鳥居內
下御於細殿御休息之後御社參御神拜了攝末社御

巡拜了於細殿供御膳從禁中親王准后等折櫃衝重
等被進從一社種々有獻物略中於二鳥居外西方設織
殿機五爲御慰入御覽又警衛向頗嚴重也未半許還御
被催此次太田御社令參給直從是令參聖席給仍又
予爲御先廻參彼御社于時申半刻許也御社内點檢
了社上下御前酉刻許著御須臾於御社東南方何間卜稱
名御休息了御神拜大床設半帖了直還御予今度從
御後戌斜還御于桂御所略中今日兩社白銀并御燈籠
二基聖席白銀并御花瓶等御奉納有之

〔附錄〕

〔長橋局記〕五月廿八日上賀茂一社中より和宮向



社參に付其せつ競馬の奉納の事願出る先例
後水尾院様靈元院様東福門院向の參詣のせつ
奉納あらせられ小例もあらせられ小由にて願
出る願の通と仰出さる、所○實麗卿記競馬の事

〔村井政禮日記〕五月廿九日和宮様今日下賀茂御參
詣之處依彗星出現御慎御延引廿○彗星の事五月

二十七日子壬能御覽

〔宸記〕九月二十七日今日辛酉公卿勅使濟祝附和宮

内親王濟等祝能也翁祝言共十一番狂言九番乞毛

有略下

三十日卯乙關白藤原尚忠九條内旨を酒井忠義に傳へ從

二位藤原輔熙鷹司の慎を解て其養母の葬儀に従事せしめんことを諭寸忠義旨を奉せす

〔尙忠公記〕九月晦日内々所司代へ御内沙汰之趣申達自下官書取之留

二十此度入道前右府殿養母逝去夫ニ付過烏自武傳

御時宜之書取ヲ以被及相談候一件武傳書取猶亦

林下官ヨリ更ニ可及示談之様蒙御沙汰候間御趣

意書尙又内々入一覽候乍併元來慎之儘ニテ葬

式之供并中陰中墓參之事如何敷譯柄ニモ當リ

候哉何卒養母之不幸ニテ難默止次第ヨリ慎被

免候儀ハ相成間敷哉此儀於關東迎モ難及評決

事ニ候ハ、御趣意書之通慎之儘ニテ供墓參等

赦免ニ成間敷哉何分可然賢考頼入存候事

右御趣意

入道前右大臣慎解之事毎々申出候得共關東差

支之趣返答故先見合居候然處老母薨去之旨察

心中甚氣毒候五刑之屬三千而罪莫大於不孝ト

申儀モ有之候間慎中ニハ候得共大喪之儀人倫

之大道不可得止之時ニ候間慎之儘ニテ奠大祭

儀式喪親之道可盡常法候左候ハ、孝道モ相立

天下之人々明鑑ト成テ理當然候間右之通ニ相

成候様所司代へモ示談早々取計可遣候事

〔按〕前條に對ふる所司代の返翰は其寫を佚す
但十月十一日關白の言上書中に九條家記所載
過日入道前右府之一件其砌早速申達候處
是亦返答別紙之通紙別申來候故奉入天覽
候是等モ先此度之處ハ迎モ若州ニハ内々
中ニテ承引不仕之旨ニ承候間甚以致方無之
次第ニ奉存候云々
とあれは深厚の叡慮も達せずして寢む蓋鷹
司輔熙慎宥免の事は春來の聖旨なり前後の
事狀詳ならされども尙忠公記正月日の條に
所司代の答書あり左に附記して考に備ふ

鷹司入道前右府殿御事御心得違之儀有之
候ニ付一昨未年春御慎被仰付候處其後御
謹慎被有之候ニ付格別御寛宥之御沙汰ヲ
以右御慎御免之儀當節屢御所向へ御歎願
被有之候間此頃右御願之通り御慎御免之
儀被仰出候テモ於關東御差支之筋ハ不被
爲在候哉御内々御相談被仰下候様卜之御
内沙汰モ被爲在候ニ付先ツ御相談御尋問
被仰下候趣委細奉畏候尙年寄共へ内々申
遣候上追テ御請可申上候事
十月三日戊午親子内親王首途儀を具して祇園社に謁

し給ふ

〔長橋局記〕十月三日和宮御首途に付ウひる八つ半とらの刻過酒井若狹守城使參内大樹公よりウ首途につきウ太刀馬代黄金一枚進獻にて大樹公よりウ口上あり略中卯の刻ウとも揃六つ過和宮御ウちきめしウあらはにて長橋の車よせより青糸毛のウ車に和宮御宰相典侍ウ居られウ人ウのり添也紫糸毛宰相典侍ウ居られウ分にて能登ウおウすウれウ人おことウれウ人也八葉におはるウれウ人おウふウれウ人のり居られウ六つ半頃ウするウ出門也南門ウ覽所へ内ウ

出御成略下

〔非藏人日記〕十月三日戊午天晴和宮御首途爲恐悦關東使諸司代酒井若狹守忠義朝臣寅刻參内自大樹公御太刀一腰御馬代黄金拾兩一匹進獻也略中其後再傳奏衆出會御返答訖而若狹守退出

内親王和宮御方御首途卯刻祇園社御參社也奉行職事頭辨長順朝臣供奉公卿中山大納言臨期不參菊亭中納言橋本宰相中將臨期不參八條三位葉室頭辨自餘殿上人地下先駈諸大夫瀧口其餘寅刻許參上供奉之女房宰相典侍乘糸車女藏人能登乘車武士關出雲守町奉行御先警固阿部越前守附武士爲御後警固自餘御

迎上京之武士等隨從宮御方從參臺殿乘御于糸毛

車吉刻卯刻自宜秋門渡御塚町三條大和列外廣橋一

位先御坊城中納言野宮宰相中將非藏人松室重進衣符

與乘松尾相永同松尾相保同等御後隨從參向

主上於南門御行粧御覽出御卯上訖而入御議奏衆

近習兩番所衆到非藏人於西穴門外御列拜見時宜

如南北祭之儀鶴間入口自端護之供奉衆休所內々

被構于八景間如南北祭之儀略中還御催御列到三條

大路而註進之後御覽所更御塞被構申刻出御宮還

御之後入御略中和宮御方自宜秋門還御酉上

〔言成卿記〕十月三日晴今卯刻和宮御首途社祇園御乘

車萌木糸毛々々〔以窠〕自參內殿御乘車內自昨夜內出

御宜秋門云々透垣以下撤供奉女房典侍〔宰〕乘紫糸

毛車云々〔命婦〕乘網代車云々自御臺所門出云々宮

御五衣著御歟御歟小女房著物具云々打出衣雖有沙

汰遂不被設云々供奉公卿以下參集丑半刻於禁中

自宮御祝酒賜云々供奉公卿衣冠衣單乘車乘檣榔

毛云々蘇芳簾衣冠乘檣榔毛歟凡不甘心大臣年始參內

定可有供奉公卿中山大納言忠能臨期不參云々勅

難參不便痔癆菊亭中納言裏衣下結亂緒云々黃青橋本

宰相中將實麗臨期不參云々御能里并宮御八

條三位隆聲紅單紅殿上人束帶乘馬云々今城中千種

少將有文岩倉少將具視中務大輔敬直橋後騎頭辨
本侍從實梁小倉大夫長季極藤大江俊堅

長順云々地下前駟已下可尋武家供奉警固等繁多

云々自宜秋門經建禮門前舊院御前堺町三條繩手

大和大路下河原自社前入御略中廣橋一位光新宰相

中將功定等御用掛列外御前へ參向俗供體人本人直衣奴

袴歟坊城中納言俊克後列同斷云々御母堂觀行院以

下上藹并御迎上藹等列外供奉云々

〔實麗卿記〕十月二日丁巳晴は○二日丁巳和宮爲御首

途祇園社御參詣也略中辰刻頃御進發於九條家暫時

御休息令到祇園社給云々御列在別冊還御之節召

八葉御車轅院御料也

七日壬戌晴今日明日於桂御所有猿樂從武家催之
御内儀女房被召云々

〔土山武宗日記〕十月三日和宮様御首途參内殿ヨリ

御出車卯半刻武宗御列外御車脇供奉狩衣著用相

勤午刻祇園社へ御著但九條家暫時ニテ相濟御車

轅御用意之處御召替無之未半刻御出車但御車轅

八ヨリ被牽酉刻前還御御車ハ參内殿へ附御轅奏者

所へ昇上ル

七日和宮様御能ニ付著地紋衣丑半刻參上略中御能

御始卯半刻終亥刻翁付御能祝言共六番狂言四番

臨期御乞御囃子三番仕舞等有之

八日和宮様御能ニ付著地紋衣寅半刻參上略中御能

御始辰刻終寅刻前御囃子三番御能六番狂言七番

石橋有之臨期御乞御囃子仕舞一調一管狂言等數

多有之御内之輩へモ被仰付相勤

八日癸亥皇女降誕理宮と稱す

〔長橋局記〕九月廿日今日衛門内侍后堀川權中納言康親女紀子

著帯にて辰の刻なれども何かとノ、七時半頃

に成せられ常所にて候ふあはの盃一こむ

參る天しやくにて衛門内侍后へたまふ直に常所

所より候格子の候間へ參られ吉方亥子の方にむ

かはれ候作法あり

十月十四日今日新宮后七夜に付名字勅筆に

て備中たん紙三つ折にてたなし紙にて候つ、

みにて候く訓ん書添られ二重の候文こに入内外と

も申口の候封付駿する河かとの殿もち參らる、候初衣

三重ね小ちいさき犬は張り子こ三つ子候まな一折長はし

口上にてするかどのもち參らる、衛門内侍后へ

候さらし五匹下さる、候名字理宮后とせうしら

れ候此よし勅筆にてあろはされ候て大乳人議

奏しゆへもち出さる、いつ一と同うへふ爾れられ候や

うに申大寸け后はしめ候名字拜見いたし候三か

しらへも大乳人申いたさる、

〔言渡〕八月四日衛門掌侍内々著帶去日相濟候二付
御世話三條殿愛○實へ被仰出候旨以駿河被申出

九月十四日陰陽頭參上以常丸申上衛門掌侍著帶
日時内勘文賜御點且吉方勘文等各可令清書以同
丸被仰出即申渡小時清書被附

御著帶の日時
三書今月廿日きのとのみ時たつ
其申口文久元年九月十四日はれ雄

右一紙物 豎
御著帶の吉方
十月辛とりにぬのし

文久元年九月十四日はれ雄

右一紙折四殿下以狀申入寫進以周丸上被留于御前

中略衛門掌侍著帶來二十日辰刻御治定之旨以駿河

被申出

二十日衛門掌侍著帶無異相濟退出之旨大御乳人

被申出

十月二日衛門掌侍臨産吉方并母屋庇之事如近例

勘進之儀民部卿御土可申渡以常丸被仰出參會申

渡候同卿被附

御臨産吉方之事

今月二日より四日まて九月中を○節の中

文久元年十月
庚申酉の
間なり

今日より十一月五日迄

十月節并中○節の中なり

辛酉戌の
間なり

母屋庇之事

今日三月三日四日十三日十四日廿三日廿四日

二十一日四日五日

右の日は母屋を避らるへし

文久元年十月二日日曜日は雄

十日昨日勘進有之候皇女御名字今一應兩人○桑原

可有勘進尤今日明日中可勘進旨以常丸被仰修政長高辻

出○昨日の勘進文は略す

十一日菅少納言被附

知萬

周易曰知周萬物而道濟天下

爲本

禮記曰聖人作則必以天地爲本

延比佐

晉書曰保萬壽延億齡

孝乃利

御註孝經曰人之行莫大於孝

誠奈利

禮記曰誠者天之道也誠之者人之道也

為政

右二通○一通は御名字一通は引文なり今其一通を略寸下亦同

八百

貞觀政要曰周則惟善是務積功累德

所以能保八百之基

多嘉

毛詩曰物其多矣維其嘉矣

煥天留

論語曰煥乎其有文章

出理多馱

禮記曰歸順備而後內和理

章布美

毛詩曰維其有章矣是以有章矣

修長

右二通再案勘進

十一月廿日理宮御機嫌能只今御參內之旨以越後

被申出略下

俊克卿記十月八日癸亥晴卯上刻許自堀川三位以

使被示狀書

衛門內侍產氣候仍早々申入候也

十月八日

親賀

兩人宛

右承知申答了直ニ同役へ以封中申入

自同上使

書狀

今曉寅刻皇女御降誕益御機嫌能被爲渡候仍申入候也

十一月八日○署名以前

吉田家日記十月十二日丁卯晴今度御降誕皇女御腹衛門

掌侍紀子堀川御胞衣今日巳刻當山内へ被納中略北

總門之邊御代官山田阿波介麻上用人足召連罷出

之處御使番浦野造酒著用白木長持一棹白丁

昇立此外根付之松鋤鋤垣竹蕨繩等持參御場所へ

令案内之處御場所ハ齋場所ヨリ由御胞衣納終テ

其上ニ松木植之其際五尺程四方ニ柱ヲ打竹垣蕨

繩ニテ結之其前ニ白木菊燈臺ニ燈火構終テ鈴鹿

石見守長存著淨衣御場所ニ著座祓加持御祈念申

上終テ退下浦野造酒神恩院へ令案内此時金三百

匹檀紙三ツ長存へ被下之旨申之御祝酒肴三種被

下之從禁裏御所持參之間清火之旨申之仍頂戴

按明年二月御箸初の儀あり左に併録す

長橋局記文久二年二月十四日今日理宮御事

日柄よく雨はしるめにて賑々の事中略つほ

ねにて祝ひしつ小豆のあかを押したけ米のうちまきに

てあかのゆかゆ出来青石かなかしらゆ三方にの
せゆ祝あろはし小長はしきかへの著用のまゝに
てゆはいせんに参るはかまなし尾張も参り小也
あかのゆかゆ濟せられ小ゆもらいゆ膳まいるゆ
するノと濟せられ小長はしゆ祝儀下され小は
つなから今日は宮ゆ徳日ゆへ明日也ひる頃奥
へ宮ゆ成せられ小少くゆ風氣にあらせられ小ま
まゆかり床のゆまゝにてゆこふあはにてゆ盃一
こん参るゆはいせん新大寸け長はし越後辰也
宮ゆゆはいせん新内し辰也ゆ盃濟せられ小口祝
参るゆはし初に付ゆ人形一箱ゆまな一折参る
略下

備考

俊克卿記十月五日庚申元文衛門内侍著帯二付御

世話正親町三條大納言被附

宮方御乳人體宮御成長之上ハ御扶持モ不被下

相成行候ニ付難澀之者モ往々有之段御不外聞

且ハ御不憐愍ニモ相成候儀深歎个敷存候御養

育第一之御乳勤仕之勞モ有之候事故何卒勤仕

中之賜物當人生涯被下候様相成候ハ、於當人

モ安心可畏存左候得ハ自然宮方御成長御祈禱

ニモ相成候事ト存候近々衛門掌侍新宮御降誕

モ有之候儀右御乳人體賜物前書之通生涯被下

候様宜御沙汰頼入存候也

十月

兩人宛

實愛

六日辛酉衛門掌侍著帶ニ付御世話正親町三條申

立一紙昨日被附今日殿下へ申入無御所意宜取計

被命

書體在昨日記八日附武士へ示達了

〔當職内覽中之記〕文久二年七月朔日

伊○附武士松平賀守所司代

の通知を受て上申せし文書

宮方御乳人體

○中略前書と同文

何卒勤仕中之賜物當人生

涯被下候様致度衛門掌侍新宮御降誕モ有之候儀

右御乳人體賜物前書之通生涯被下候様致シ度段

正親町三條大納言被申聞候之趣書付各被差出之

則江戸表へ相達候處宮方御成長之上御乳人へ生

涯御切米御扶持方被下候儀ハ難被及御沙汰候間

其段可相達旨各へ申渡候之様年寄衆ヨリ申來候

間得其意可被相達候

右之通酒井若狹守申聞候ニ付此段申上候事

九日甲子備前國曹源寺先住太元に妙覺果滿禪師の諡

號を賜ふ

〔内覽文書寫〕十月十二日清岡大内記殿言上

勅放無量光國師之遙冑太元和尚鳴蟄龍匣吹毛之

劍殺活臨時出老蚌胎明月之珠隱顯難測曾沐天澤

曹源浪高常輝佛光閃電猶遲道播紫海龍象追慕德
接旭城檀信歸崇可謂法海船筏寔禪林棟梁也美譽
芳聲達上天不勝叡感殊賜褒章諡妙覺果滿禪師

文久元年十月九日

〔按〕曹源寺は妙心寺派備前國岡山に在り

九條家本

内覽留
に據る

孝明天皇紀卷百二十一

文久元年辛酉十月二十日乙亥親子内親王京師を發寸今

明二夜大津驛に駐り中山道より東下尋て江戸城に

入る

〔尙忠公記〕十月九日和宮御直書寫

上略觀行院にて願ひ出立延引の事中山橋本餘ほ

と念入所ろうにて廿日迄に全くわいの事をほ

つかなくをひし寒さに向ひ道中はむつかしき

由醫師共申居由承り由まゝ右兩人は萬事世話

いたしくれ由人々又宰相中將は前よりせわに

成力に致し居由事故一しよに參り由はねは心ほ

ろくろんしひま、何とろ所ろうとくと全くわい
致しひまて出立見合の事願度ろんしひまかやう
にかやうに外せきの事にてかれ是申上ひは恐入
ひへ共右の所關東より程よく申請に相成ひ招仰
立られひたすら願上ひめてたくろしく
右若州へ通達之案

別紙之趣和宮ヨリ御願出シニ付上ニモ無餘儀
御次第被聞食候得ハ甚以難被仰立御次第ハ勿
論之御事ニ候乍去和宮御心中御推量被爲有御
歎願之趣モ難被默止被思召雙方へ被對御心痛
之御沙汰ニ候得共何分宮之御願御氣毒ニモ被

爲在候儘何卒御歎願通り暫御延引ニ相成候様
篤ト其元迄可申入旨内々之御時宜候間何分關
東へ早々御示談可有之候様下官ヨリ頼入存候
事

十一日言上之覺

略上 過日蒙御内命候和宮御東行御日限御延引宮
御歎願之依御子細御見合之段若狹守へ内談篤
ト仕候處別紙之趣輒差出候儘奉入天覽候最内
内口述ニモ誠ニ無御據御時宜之御場合ハ深拜
承候得共廿日之處御延引ニ相成候テハ將軍家
ニハ勿論數千人之手違難儀之譯ニテ甚恐懼仕

候得共別紙之通押テ奉願度候趣尤關東へ内談
之旨モ再度引合仕候得共廿日迄之日數モ無御
座押合候日數之中ニ廿日ニモ相成可申左候へ
ハ其御不都合之段ハ申上候迄ニモ不及存候儘
此段譯テ下官相含申沙汰可仕之旨只管歎願候
故先々致方モ無之儀如此候略下

十月十一日

尙忠

從若州差出別紙之寫

御別紙之趣和宮御方ヨリ御願出ニ付主上ニモ
兼々關東ニモ無餘儀御次第之事被聞召候得ハ
甚以難被仰出御次第ハ勿論之御事ニ候趣乍去

和宮御方御心中御叡察被爲有御歎願之趣モ御
默止難被遊思食御雙方へ被爲對御心痛被遊候
得共何分宮之御願御氣毒ニモ被爲在候儘何卒
御歎願通り暫御延引ニ相成候様篤卜私迄可被
仰下旨御時宜ニ候間何分關東へ早々申達候様
殿下ヨリモ御談之旨委細拜見仕候先以宮御方
ニハ遠隔之土地へ御下向之御事ニ被爲在候間
御心細ク思召候段ハ誠ニ以御尤至極ニ奉伺候
主上ニモ右之處深ク御叡察被遊御沙汰之趣ハ
御尤至極之御儀卜奉存候併中山大納言ニハ此
節ハ追々快方ニテ供奉モ相成可申旨醫師卜モ

申候由ニ付乍恐此儀ハ御案思被遊間敷様奉存
候橋本宰相中將ニハ供奉ハ難儀ニモ可有之哉
ニ候得共併少々宛モ快方之趣ニ承リ候間御跡
ヨリ東海道氣儘ニ下向相成候テモ御入城迄之
御間ニ合可申哉其儀ハ兎モ角是程迄ニ切迫ニ
相成關東御待受之御都合ハ勿論既ニ御宿割之
者等モ致出立御道中宿々之設人馬之用意迄モ
相整御迎之者共數千人上京罷在各屈指御發興
之日ヲ相待罷在假令一日御延引ニ相成候テモ
關東迄御手都合大相違ニ相成許多之難澀難量
次第二御座候處纔力壹兩人之供奉之堂上所勞

之故ヲ以テ御延引之御沙汰ニ相成候テハ乍恐
天下之人心相服不申候儀ニ奉存候實ニ宮御方
ニモ如此迄ニ數萬人之難澀相成候儀ヲ被爲聞
食候得ハ供奉之堂上一人之御憐愍ニ寄テ萬人
之難儀ニ御替被遊候儀ハ被爲在間敷奉存候兼
兼御賢明之御聞エモ被爲在候御儀右體之御願
ハ何卒關東ヘモ相聞エ不申様仕度候間私限リ
先ツ御請奉申上候可然御勘考之上言上被成下
度奉願候事

和宮御書之寫

味書かしてまり拜見申上ら中山橋本所勞
に付下向延引の事願上ら處御上にもをひを
ひ寒さに向ひ下向の事らあんし遊はし戴ら折
からにて早らく仰立られ戴らところ是迄に相
成たらの手つ、きらよういならさる次第に
付ら斷申上ら若狭よりの書取見せ戴承りら
宰相中將にも願ら跡にて延引の事申らかせ
外へはいかふら恐入ら由にて夫はら願らさけ
のやうにと申らしらま、私の身にとりらて
は誠に心ほらく存らへ共若狭よりの書取らよき
なき事らとらんらしら上宰相中將よりも願らさけら

やうたらんら申らこらしら故致らしかたもなくら間
もはや延引の事願申らさらすら去中山にはをひ
をひよろしく廿日には出らよの由橋本には廿
日出立の事は六からしらき由にらへ共追らよろし
くらは、跡より追付参りら招申らこらしらま、先
廿日出立いたし橋本著いたしらまで幾日にらて
も清水にとりうの事願ら何とらんら是た
け若狭にも承知の招仰立られの事あけて願
度右承知の事相成らは、なんきらにらへ共廿日
に出立致らしら事とらんらしらま、毎度ら
恐入らへ共よろしく願上らなをら先日仰

戴小中山所勞に付一先歸京いたし度との事と
くとかんかへ小所外の事とちかひ所勞の事迷
惑と氣の毒に存小ま、仰戴小通廣橋一位と一
しよに一先歸り一位下向のせつ一しよに下向
の招仰出され願上略下

御請言上

誰そ申給へ

ちか子上

十五日

○左の文書は所司代の
奉答なり其達書は缺くの

和宮御方御下向御日限之儀ニ付御別紙之通御
返答被仰上候旨從主上右御書ヲ以殿下へ被仰
出候間關東へ通達可仕旨尤御願面之内橋本宰
相中將下向迄清水ニ御逗留被遊度ト之儀并中

山大納言所勞ニ付廣橋同伴ニテ一先ツ上京猶
又爲御迎兩卿一緒ニ下向相成候様ト之御兩條
之儀御申立通り相成候様心配可仕旨被仰下候
趣夫々謹テ拜承仕委細奉畏候先以廿日御發輿
ニ御相違不被爲在候旨難有奉存候橋本宰相中
將下向迄清水ニ御逗留之儀ハ幾日ニテモ御宜
御座候儀同卿下向御都合宜敷上御入城之御日
限御治定相成候テ宜奉存候且又中山大納言一
先ツ上京追テ廣橋ト一緒ニ爲御迎下向之儀是
又聊モ於關東差支候儀無之ト奉存候最早往復
之間無御座候間右御兩條御願屹度私儀御請合

申上候尤右之通御請合申上候段ハ以急使關東
へ相達置可申候事

十月十五日

〔長橋局記〕十月九日和宮向關東へ下向に付
る寸ると發興あらせられ道中何のノ上障
りもあらせられぬやうに今日上下御靈加茂下上
北野祇園をんへ一七日の祈禱仰付らる、以前
に初穂出さる、十五日今日巳の刻和宮向關東下向いとま
十五日今日巳の刻和宮向關東下向いとま
參内にて卓香爐髪をまな一折上られ小くし上
向かもしかけられ五つ衣にて常所にて對

面二こんの盃參らせられ二こんめ天しやくに
て參るははいせん手長とをりあり濟せられ
小て其盃のまゝにてお末れう人始へ天しや
くにて盃たまふ濟せられ小て退あろはし
五つ衣めしぬきくしわらははに直しあろは
しゆしゆちんはかまにて桃柳の間にて對
面口祝せん一所眞の料理にて出る
親王向准后向も一所にてあらせ
られ中略夫より准后向へちきめし小ていと
まに成せられ准后向もちきにてあらせられ
親王向もわらは直衣にてあらせられ小准后向

にてはこふあはの盃一こん進せられ
廿日ひる七つ半今日和宮ぬ發輿に付長はし
桂所へ八つ半頃より見立に參らせられ親王
ぬより高松殿參らる、准后ぬよりおいをぬれう
人參らる、六つ半過頃和宮ぬ桂所より出門
にては機嫌よくする、なりこなたは覽所へ
成せられ日の門とをりになりは行れつは覽し
られ濟せられて入御成
十二月九日和宮ぬ來る十一日辰刻は入城あるは
しは婚禮は日限の儀は追て可被仰出は此段は達
可申旨年寄ともより申こしはよし所司代よりの

書取ひろうあり

兩傳奏しゆより書狀にて

和宮ぬ來十一日辰の刻は入城仰出され恐悅存
は且兼て被仰入は來春は上洛の儀は約束の
通は承知の旨關出雲守は使として旅館迄入來
早速宮御方へ言上聞かせられ幾久しくめて度
恐悅に存は仍申入は

○下略御上洛の事本紀十二月三十日參看

〔宰相典侍嗣子記〕十二月十一日晴は機嫌よくは早

くは目覺は誕生日故小戴はすわりは祝酒も今日
はめてたく宮ぬ計にては跡はは祝のはしの事已
刻ころは化粧濟せられは五衣めさせられ

中略もえ

木糸毛にめさるゝ、水乗添嗣子尤五衣髪上にてな
り御車の水簾橋本宰相中將水なり紫糸毛に能登
履水お季履也八葉のかたお信履水お琴履也略中午半刻
頃にも水はん水ら水本丸水車寄へ水著水車水簾橋
本宰相中將履也水車より出させられ一同水供に
て大表より大奥へ成せられ水て宮水々水殿へ水う
ちつきに成せられ上段の水座へ成る水のし上る
水五衣の水まゝにて大奥の人々水對面成水客あしらいと申役
しめ水め通の人々水對面成水院○將軍○生母○も此時水對面成參
の人誘引致水事實成院○將軍○生母○も此時水對面成參
らせられ水大勢の人々水濟水て水化粧の間にて一

寸水つ水くろひ遊はし夫より水對面所の上段にて
大樹水々水對面成參らせられ水對座也宮水々水五
衣の水まゝ、大樹水々水小直衣也是は宮水々水より此度
水入城に付進せられ水のなり水對面濟せられ又
又水ろ水う下迄成らせられ水待合せの水事夫より
宰相始め水對顔三仲間水附一同もなり水引つゝ
きに天璋院水々○將軍○嫡母○水對面前の水通也天璋院水々
水水う水ち水き也宰相はしめ何れも前の通水對かん還
御にて水膳上らせられ水對面所にて水祝も上り
水水搖水寸なから是は委しくは心得不申略中夜に入
大樹水々水天璋院水々水も成らせられいろ水進せら

れ物あり中略風違の事ともにて大々もやもや
混雜の事心外恐入中略事共なり

〔非藏人日記〕十月二十日乙亥晴内親王和宮關東御

發輿從桂御所御出門辰刻奉行職事葉室頭辨長順朝

臣供奉公卿中山大納言忠能卿菊亭中納言實順卿

八條三位隆聲卿殿上人今城中將定國朝臣千種少

將有文朝臣岩倉少將具視朝臣富小路中務大輔敬

直朝臣橋本侍從實梁朝臣小倉侍從長季北小路極

蔭大江俊堅其餘地下瀧口女房宰相典侍命婦能登

武士御先警固町奉行關出雲守自餘御迎上京武士

加納遠江守若年寄老女已下隨從御列外廣橋一位光

成卿坊城中納言俊克卿野宮宰相中將定功卿御用

掛同列松室豐後重進鴨脚加賀光長松尾但馬相永

松尾伯耆相保等下向也中略猿个築地從穴門御旅粧

内々御覽下略

〔俊克卿記〕十月二十日寅刻許參桂御所和宮御在所也依御

列外供奉也狩衣奴袴供麻上下但年頭御使相兼參向二

付和宮御發輿後經便路歸宅整御使之具改旅體向

大津驛兼日申合如此同役廣橋光成同斷先同役發輿

承繕直二發輿了

〔言成卿記〕十月廿日晴今日和宮關東御下向御發輿

御吉刻卯刻然而眞實八辰刻云々從桂御所御出立

御板輿御俗供云々從猿辻日之門前清和院門廣小路京極通云々禁中御覽所猿辻穴門被設略中供奉公卿殿上人以下寅刻桂御所へ參集人々無障奉從本橋發與宰相今日不爲供奉後日廣橋一位桂御所御發與御用濟歸宅其後自里亭發輿略中町奉行并若年寄加納遠江守上御迎京供奉今晚大津驛御泊壹个日御滯留其人申混合御先馬不行云々驛旅館等野宮相公羽林昨日發輿御泊御座間以下點檢御座間清祓幸德井相從云々

實麗卿記十月十九日甲戌晴明日和宮御發輿也而予所勞雖及順快長途之供奉難成略中快方次第從御跡追付可申兼而相願置

廿日乙亥晴今日和宮關東御發輿也○此間公卿殿地下前駟十人典藥寮一人列外衛府侍四人口此外列外廣橋一位坊城大○中納言野宮宰相中將但旅體之間從御後次第隨從口向取次已下數輩前後武士警衛數多不能毛舉委在御列書今夜大津驛御止宿觀行院無異被隨從了

廿一日丙子晴今日和宮大津驛御逗留也依之窺御機嫌爲御暇乞幹子○實參彼驛從今日公卿殿上人四五輩御止宿驛前後相替止宿於實梁ハ御止宿近隣止宿便御用又野宮宰相中將御泊場所每事點檢武傳共同驛止宿又地下前駟其餘無御道中御用輩

東海道下行也今日大津驛迄爲勅使中務權大輔○

岡健資參向具視敬直等朝臣奉勅旨云々如何如何幹

子歸來所語也不可說○勅旨の事は本紀十

十一月十三日丁酉○實麗の發程は十月廿八午刻

過著品川驛今夜此所止宿從勝光院方書狀到來使

吉田志津馬召前種々傳言坪内伊豆守大樹家來彦坂來

請面會則謁之此事勝光院文中酒井若狹守家來三浦

七兵衛此者出府當驛止宿之由爲見舞來及對面又九

條家士島田勘同上之由

十四日戊戌晴辰刻許出品川驛午刻前著板橋驛當

驛混雜無謂計且驛中休所之場所無之休息于寺院

不知其名從御本陣須臾參御本陣未半刻許宰相典侍

觀行院其餘四人御先著申斜著御今夜此所御止宿

御道中御安全中略殊ニ木曾路御道中之處雪一切無

之寒氣例年ニ相違頗暖和之由是全和宮御威德朝

家之暉照下所仰也今朝板橋休所へ昨夜來坪内家

來又々來則面會申云於品川驛申條々之内勝光院

方明日清水館へ御待受參上之事吳々早速花園大樹

上藤也公正朝臣女申入之事言上從觀行院花園へ被申入之

處承知之由廿三日吉氣之間

十五日己亥陰晴申斜小雨午刻過板橋驛御出立男

方一位中山予野宮實梁等奉隨從自餘人々御列外

參向申斜清水屋形著御一品○廣橋已下參著一同

窺御機嫌并恐悅等以淡路守○山武宗言上一品被

招于候所來廿三日吉辰之間御入城之事以一紙出

雲守申出之旨從予可伺御內儀之旨被示則以淡路

守御內儀參入之事申込良久被召先窺御機嫌御入

城日限之事言上又宰相典侍觀行院等申入之處從

兩三日已前御風氣之間先御見合醫師言上次第二

子被仰出候間御治定之事暫見合候樣御沙汰

十七日辛丑午後參宮御方御旅館有御沙汰儀御入

所風等花園上請面會御趣意之處申入尤昨夜從出

雲守申入吳候樣申旨毛有之酉刻退出

十二月四日丁巳參宮御在所御入城日時被仰出恭

賀申上又過日已來段々申入御所風之事兔角奧向

不折合之間其旨言上又花園面會之處御所風之事

從先日段々承候得共込毛花園力ニテハ奧御用掛

人々承知毛無之間此上ハ表役人へ申談吳候樣被

申依之其旨宰相典侍觀行院能登少進等申入

五日戊午參宮御在所中山亞相同參上及面談御所

風兔角不折合迷惑之段申入又極祕事有尊之儀外存

之儀歎息

六日己未從中山亞相密書到來御所風內々其趣可

申上置被示雲州何事申出スト直參宮御在所中

山被示之旨言上宰相典侍已下申入

十日癸亥欲為休息之處坪内豆○伊家來環彦坂來明日

御入城之事有之候テハ如何様之儀出來モ難計之

間御延引相成候様可取計之旨此事甚以難事其上

最早子半刻無程予出仕刻限也雖然急度申立子細

有之儀ニ候ハ、兔モ角モ可取計旨申答之處其儀

差支之旨也左候ハ、難取計申入了誠ニ難事而已

迷惑之至也事○伊豆守密告の

十一日甲子晴今日御入城也略中午刻前有御出催仍

公卿以下下殿列立于堀重門内以上具御所方為殿上前

驅聊退列立於後殿上人者具侍隨身等但殿上前驅

計程離列前行予列立了參御車地下前驅列立于堀

重門外陰陽寮在其末色各一具雜人典藥寮以下同上相對

但前行武士始追々守次繰出之間前驅無假立直前

行先是寄御車萌木糸毛立廻女房開輦戶次勅別當

中山大納言能忠參進于御車寄之邊檢知次親呢公卿

予同參進奉仕乘御之儀乘御了中山亞相予等復本

列次陰陽寮參進於御車前勤反閉奉行職事長了御

車牽出瀧口候前陣豫於大門外懸牛遣如例諸司供

奉奉行職事長順朝臣後騎次出車次公卿扈從外御一列

位坊城野宮御後武士群行自清水館吹上竹橋門等此後相從姬

路侍從屋敷脇通大手門入御走雜色五十人於大手

門留後騎并殿上地下前驅以下到衛府侍下馬但後
四位五位殿上人渡橋於冠木門內下馬地下前驅以下
四位五位殿上人渡橋於冠木門內下馬地下前驅以下
六位輩於下手前馬公卿入三ツ門下車入中雀門堀重門
等御車奉寄奉本役人先之放牛出車准之先是殿上前
驅入堀重門列立車南上東面地下前驅堀重門外中山
已下車寄前列立西南上中山予離列參進予昇階屏風
入後下御之儀奉仕進退一如始了御下車了予復列
離復列直離列首從上以下各退先傳奏兩卿爲御使登
城次公卿以下追々登城公卿殿上人殿上間地老中
出會有挨拶次大樹公天璋院方本壽院方へ被進物
御使傳奏相勤御目錄老中へ相渡此間中山亞相以

下殿上次間へ披夕次武傳以下大廣間二之間へ出
席高家無御滯御入城被爲濟恐賀謁老中申入和宮
院方同次於白書院勅使兩卿公卿并奉行職事於紅
葉間殿上前驅等賜祝酒老中有於檜間地下前驅以
下晴褻之輩於蘇鐵間使番以下祝酒次第仕丁頭以
下於玄關前腰掛等被下赤飯了於大廣間老中出席
西上御入城相濟候爲御祝儀大樹公和宮御方賜物
寄附一位以下到極蔭參于大廣間二間演老中御口
上第一同列座各申畏由了同三間迄老中相送於同所
賜物并御祝酒御禮申述退下○以上原記
附錄

〔九條家文書〕

和宮御下向之節大樹公始へ被進物内談濟來候間

所司代切紙入御覽候中略言上頼入存候也

七月廿九日

關白殿諸大夫中
光成

和宮様御下向之節

公方様へ

御烏帽子 御小直衣 御衣

御單 御差貫 御末廣

天璋院様へ

御手鑑 十二月 一箱 御衝立 一箱

本壽院様へ

御軸物 二幅 對 一箱 御歌書 一箱

姫君様其外何レノ御方々へ被進物有之候哉如

何様之御品被進御宜ク候哉并三家之衆年寄共

始其外何レノ役々へ被下物有之候哉如何様之

御品被下御宜ク候哉被成御承知度旨先達被仰

聞則關東へ相達候處公方様天璋院様本壽院様

へ御書面之通被進候様御兩卿へ御達可申旨年

寄共ヨリ申越候且又姫君様方等へ被進物其外

被下物等之儀ハ桂御所女中ヨリ大奥老女へ承

合候様可被取計旨是亦御達可申旨申越候事

七月○以下の一通は八月廿九日の書なり

和宮様御下向之節禁裏ヨリ公方様天璋院様へ御言傳物何カ被進度候處御品柄何成共御好之御品モ被爲在候得ハ御内々被仰出候様被成度被思召候旨委細御申越候趣致承知候別段之思召ヲ以被進候儀猶御好等被仰進候ハ御斟酌被思召候得共格別厚御沙汰之次第ニ付無御伏臆被仰進候當時堂上方之内和歌書畫短尺懷紙色紙之類被進候得ハ別而御滿悅可被思召候天璋院様ニモ御同様ニ卜之御事ニ候間右之趣其筋へ御申達可然御取計被下候様奉存候

備考

三浦吉信所藏文書

關雲州へ請書扣○十月廿五日

去廿一日同廿二日大津驛ヨリ兩度之御書追々相達難有奉拜見候中略御發輿御當日翌日卜打續稀ナル快晴ニテ別而御都合御宜敷人馬繼立等迄一事之御心障モ不被爲在萬端御スラストラ卜御運ヒニ相成候由誠以恐悅之御事乍恐全不一方御配慮御丹精被爲盡候故之御儀卜難有奉存候廿日早朝學習所前へ御見立ニ罷出御板輿通御ヲ奉拜初テ眞ニ御安心扱々恐悅之御事難有御事卜胸ヲ撫テ才

ロシ語合候事ニ御座候御仰之通り世間ニテハ今更ニ無キ事之出來候様ニ不審カリ候哉ニ相聞實ハ私共迄モ通御ヲ奉拜候迄ハ如何有之哉天變難計トキツキツ仕居候仕合此度御延引ニ相成候ヘハ夫社最早御下向之期ハ有間敷處先々恐悅無此上全御一同様一貫キ之御丹精被爲在候故之御儀ト難有奉存候是マテハ種々様々之惡說モ御座候處御首途之日ト申廿日ト申シ前後稀成快晴ニテ流石之惡徒共モ口ヲ閉候哉今日ニテハ御運之強キ格別之宮様是社自然之御縁組抔ト計申一同恐悅カリ惡徒ハ絶テ相聞エ不申彌御靜謐ニ歸シ可

申ト難有奉存候

略下

久世家文書

○千種少將書翰

録節

昨日^{日廿一}登城對顔等無滯相濟畏入存候誠以將軍家建物有様扱々美々敷一向不埒成儀言語難盡目當テ、見ラレヌ程之儀假令ハ門徒宗之佛檀見ル様ニ有之唯々俗々タル物ニテ大廣間簾ナト掛互シ有之總テ古金欄ナト縁ニテ存外成物ニ候且登城ハ辰半頃相濟候ハ未半頃其間加賀中納言之詰所トカニテ一同休息尤火爐田葉粉盆等ハ一切出不申云々將軍容貌ハ先ツ久世三位ニ似寄候人體

二候色之黒サモ先右卿同様ト見受申候各左様ニ
申居候御一笑可給候御道中以下今日迄之暖氣快
晴續於此地一同感心仕居全ク天神之孫此地へ爲
下給ニヨリ此程之事ハ可有之ナト申唱へ下方大
難有尤御下向後風サへ立不申夫故火事ハ大小共
ニ一切無之併个様之節ハ嚴敷制止モ可有之儀ニ
ハ候得共此度ハ格別ニ穩成儀全ク爾後天下相治
御平和ニ可相成吉兆ナト、大ノ古學者國忠之者
ナトサへ申出感伏ニ候云々

和宮京都御出立之儀注進迄ハ於關東閣老始アヤ
フミ居手ヌカリ居候由ニテ其注進有之候上彌ト

申事ニ相成大騒ニテ晝夜掛リ萬事調候由扱々不
存寄儀ニ候併何分何分下方トハ乍申色々世說申
唱候ニ泥ミ居候儀ト三浦モ大笑仕居候事ニ候云

云○此書猶本紀十二月十三日の條に分載す

十一月廿二日

子和

桃源君

○久我右大将

眞成君

○正親町三条

○岩倉少將書翰

節録

十一月十六日著府之處其後和宮御方御風邪少々
御念入候由觀行院同斷少進同斷ト申事是ハ如何
可相成事ト存候處漸ク廿九日御仕舞被爲出來一

昨々日漸ク十一日御入城ト被仰出候表通りハ御
風ニ候得共内實ハ様々違約之事共有之本丸大奥
ト不折合事哉ト被存候先來年御上洛之事次ニ御
所風之事專ラニ候小子從中山内談ニテ過日モ行
向一昨日モ行向候様之事昨日モ來狀ニテ此上ハ
橋卿へ萬事打明談シ早川へニテモ小子ヨリ違約
之廉々尋問之事噂ニ候得共橋卿父子之内一人ト
早川三浦ト同席ニテノ事ニ候ハ、始ヨリノ次第
顯然ト申聞承知之廉々ハ十分ニ可押詰ト答へ候
所ニ候右申候ニハ子細候宮御方何ヲ被仰出候テ
モ橋卿兎角被申候テモ雲州左様之事被仰候テモ

イケヌ事イケヌ事内實ハ主上御妹御一人ヲ江戸
へ御賣被成候事萬事主上ト殿下ト御承知之事抔
ト心切ラシク申立辨舌ニ任セ言廻シ候旨ニテ宮
ニモ大御歎息之御様子橋卿ニモ不服之趣無理ニ
モ無之旁以上御明リモ立テ上度又御兄妹之御間
ニモ不懸様ト深祈念之事ニ候如何可成行哉時宜
ニテ十一日モ治定仕兼候事哉ト被存候扱々苦々
敷事共ニテ候併今日ニ至リ候テ十九日御沙汰ト
申候條々大ニ御用ニ立申候事ト存上候事共モ在
之候云々月○十九日御沙汰云々は本紀十二
月十三日の條所載の内勅ならん
一女中向何レモ無事之由ニ候併居所食物類何レ

モ嚴敷モノ、由針妙向ハ泣暮シ候一口ニダマ
サレタト申居候由ニテ是ハ昨日從中卿尊ニテ
申三浦へ段々申聞候所大仰天ニテ早速取調ニ掛
候由ニ候何カゴテゴテ行違計ニテ始末不揃事
共ニ候併老若若○老中杯之所ニテ格別厚取扱之
旨ニ候得共小役人向又請負杯之行違ニモ相聞
之エ申候頗ル不都合ニ候云々
一水浪靜謐之由併宮御方御道中之時彼是ニテヨ
ホドノ人數召捕候由早川咄ニ候云々
一異人外出止之旨能々承知致候事ト存候早川ニ
承候所無相違由ニ候不審之事全ク宮御威光哉

朝威ト存候云々

○此書猶本紀十二月十三日の條に分載す

十二月五日曉天

富妍

眞成君

十一月十六日庚子月食

〔文久元年曆〕十一月十六日月帶ろく二分夕七時六分

かりかけなから出七時九分右の下の甚かしけくは暮し
時三分右の方におはる東國にては出て甚かしけくは暮し
しむへ

十九日癸卯新嘗祭

〔非藏人日記〕十一月十九日癸卯雨新嘗祭也奉行職

事右中辨豊房小齋大齋公卿諸役至六位侍中刻限
參侍

二十日甲辰時雨豐明節會也奉行職事右中辨豐房
內辨右丞相○花山院家厚外辨公卿已下諸役雲客至侍中
總參陣被始直出御酉半一刻過入御略下

言成卿記十一月十九日雨降入夜光氣渡天虹色五如

晝見云々今晚新嘗祭行幸被爲在云々依雨儀被寄
葱華云々羽林雨皮作法可有之處到行幸前雨止之
間覆雨皮計被撤廻雨皮云々傳聞召仰秉燭相濟云
云行幸戌刻前還幸丑半刻許寅刻前解齋云々

二十日陰晴不定申刻許豐明節會御服參仕略中秉燭

陣被始云々內辨右府厚家大納言以下著陣可尋節會

雨儀雖雨晴深泥云々略中出御帳代依雨儀無警蹕云

云內辨陣後早出云々續內辨大炊御門大納言云々
雨儀於宜陽殿壇上謝座昇殿物召了公卿經回廊參

上公卿堂上之後入公卿堂上了入御

二十七日辛亥內侍所三箇夜御神樂連宵御所作あり

宸記十一月五日獻上勘文中鷹檀紙豎折以同紙表包

陰陽寮

擇申辛酉二付御祈三箇夜御神樂之日時

今月二十七日辛亥時酉

文久元年十一月五日

筑前守賀茂朝臣保之

越前守賀茂朝臣保章

權助兼權曆博士近江守賀茂朝臣保行

右治定日時長橋へ申渡刀自へ申渡

十二日三个夜御神樂予所作候内陣ハクヲ候間

燎十分アカク燒候様大體和琴絃目分候程ニテ宜

敷候右又得度奉行へ可談合申付置

廿五日申刻許人數按察前大納言長有四辻中納言宰

相中將胤重源三位徳重六角三位石野三位櫛笥中將四

辻侍從等參予上ノ間奥ノ座後屏風一金巾子袴末

廣御神樂宵丈申合試樂了テ退拍子按察前亞笛四

辻中納言□□按察使其々申合致了テ退于時酉

廿七日辛未晴陰不定今日三个夜御神樂初日也内

侍所へ鴨五羽樽御鈴始所作生鯛一折但當年暖氣

鯛ニ付生奉ル

御神樂總テ具散狀四折奉行獻上以篤丸于時酉二

刻半過大典侍長橋湯ニ行於常御所下段山科少將

へ少將内侍渡於位袍次ニ其へ出御申出次沐浴兩

人參向於常御所刻限陪膳新典侍次出御裾笏

按察使典侍劍少將内侍燭新内侍草履篤丸於朝餉

兩袖新大納言繰出シ三位中將次出御如例次第有

別紙早韓神濟歸于時終夜著金巾子切袴等

聽聞ニ内々小袖被ニテ行先以議奏暫壇ノ所ニ

テ聽聞ス于時得錢子本其駒了テ歸于時丑半二刻

前

二十八日壬子晴午刻頃雨入夜霽今日三个夜御神
樂中夜也酉二刻半過總テ具由言上略中出御事々如

昨柳畢テ歸于時寅刻

無程内々出御ノ旨以常丸申出于時子半刻次内々

聽聞ニ行如昨于時吉々利々末其駒了テ歸于時丑

刻

二十九日癸丑陰雨今日三个夜竟夜也酉二刻半過

總テ具言上散狀四折上關白不參裾與奪四辻中納

言臨期不參等言上

略中

出御事如連日早韓神了歸于

時子一刻過

〔長橋局記〕

十一月廿七日

略上

出御まへ大寸け履長は

し參向初夜ころ内侍所へ内參内寸、濟され内て

尾張さい

刀○さいのいは

退そかせ内夫より北の内から

戸ひらきかけ内へは職事しゆ衆ひら開かる、夫より

内劍長はしうけ取内座の内右のかたへひの内座

の内とをりに上置内夫より内和琴五位職事より

うけとり大寸け履へ内渡し申也御前へ上らる、

内から戸職事しゆ開しめよせられ内長はし内しま

り致内也夫より段々内次第あらせられ内所作あ

らせられ内中た立ちにて内するノ入御成其せつ

北の内から戸長はしひらきかけ内へは職事しゆ

ひらかる、次に和琴大寸け履寸へさる、うけ
取ひて五位職事へ長はし渡寸次に和劍寸へし
てうりん殿上人へ長はし渡寸略下

〔勝長卿記〕十一月廿七日自今夜三个夜御神樂被行
之依辛酉也今度御所作被爲在享和度之御例云々

〔内侍所御神樂御劍出仕備忘〕十一月十二日略上今度
御所作有之由風聞後日廻狀到來和琴御所作被爲在由也先帝之御時
無此事光格帝御代享和中被爲有由也

廿九日略上抑今度御所作和琴音律聽者流感涙云々
余雖不知此道只催感情頻也後日聞達道人之處果
如此最難有事也

〔非藏人日記〕十一月廿七日辛亥晴入夜雨内侍所三
箇夜臨時御神樂初夜也奉行職事頭辨豊房朝臣其
外到六位侍中參侍略下

〔按〕宸記中の刻限は時の刻限にあらず小供間
の御借音にして當時の慣用文字蓋小供間は
御間食品の一名なり又廿八日の御條に寅刻
とあるは子刻の御書損ならん

十二月十一日子甲辛酉の例に依て不動法を紫宸殿に
行ひ五大虚空藏法を随心院に修寸各七日

〔宸記〕十二月十一日自今日七今日於南殿修法有之
於随心院自坊祈有之酉半刻許御修法初夜法具候

可被始哉内々出御伺等言上直ニ可始無出御等申
出亥半過刻許初夜法無異濟言上長橋申入

十二日秉燭許御修法初夜法具候可被始哉内々出
御有無伺長橋申入無出御直ニ可始答

今度御修法ハ例年御修法ト違秘法ニテ肉食妻
帶ノ人ハ南殿聽聞ニモ聞事ナラス御上ハ御別
故法解候間無子細ノ旨奉行申候由且出御モ例
年ノトハ餘程前弘ニ被仰出ス候テハ差支候由
奉行申出ノ旨長橋申入

初夜法濟由言上長橋申入于時戌半刻許
十四日今日中日故兩導師へ五合五荷藏人辨使ニ

テ遣也

十五日來十七日座主宮參上之處迎モ御對面ニ獻
天盃頂戴出座難出來候間臨期御用被爲有ト力ニ
テ無御對面様被仰出候様願候旨申入ニ候由大寸
け申入承知之旨答

酉刻少前初夜法具候可被始哉伺衛門内侍申入可始答其

へ出御以篤丸申出月水服者之輩且□無間テモ無

子細哉奉行へ尋合以同丸申出少時何レモ無構由申入

次内々聽聞ニ行例年御修法ノ時通中半ニテ歸于時許護摩

始掛也後刻濟言上如例

十七日今日兩修法結願也座主宮參上結願之由言

上略中有用無對面旨申出下襲大口賜之間宜取計納
弘蓋以女房申出實過日願之也

廿一日隨門參上修法無異相濟言上中日拜領物之
禮申入略中次出御直衣□大□侍無著學問所中段之座節如

朔議奏近臣侍座次久世三位伺氣色召隨心院門跡

參下段拜貌少進三加持了了復座久世三位參進座

左納于梨地弘持退隨門之前修法之賞賜由演了了

本人持退次歸此後於同所賜天盃等也略下

〔公卿補任〕十二月十一日自今夜七箇日於南殿被行

不動法御祈依辛酉阿闍梨天台座主入道二品親王

昌仁奉行博房

自今日七箇日於隨心院本坊○前大僧正被行五大

虚空藏法御祈依辛酉奉行博房

〔非藏人日記〕十二月十日癸亥晴辛酉御祈自明十一

日一七箇日之間於南殿被行御修法依之御殿前日

構也殿奉行衆參仕時宜一如每春阿闍梨宮御休所

被構虎間

十一日甲子晴於南殿被行御修法座主宮并梶御勤務

事虎間鶴間諸大夫間等宮御拜借也

十四日丁卯飛雪於南殿被行不動法阿闍梨座主宮

勤修如連日

十五日戊辰曇天於南殿座主宮御勤修如連日入夜

御聽聞所出御也總而御詰之沙汰議奏衆已下南殿
御後へ被詰

十七日庚午晴不動法滿座也阿闍梨天台座主昌仁
入道親王并梶結願之后自御休所御參進于内々方御

服御衣御拜領云々略下

〔平田職修日記〕十二月十一日辛酉御修法夜初二付予

著束帶雜色申刻出仕中略南殿拜見申試候得共祕

額間左右二個間垂簾額間簾廂悉格子下額間格子

〔非〕格子ノ内白幕張額間絞廂東西戸開内二屏風立

有之簀子額間西ノ柱二水香臺有之母屋壁代ノ

下二例御修法之通白幕張有之御帳臺額間左右

之柱灯械一丁宛掛座主宮御方也日月華門開有

此外二兩方共通御附番

右ハ及見候故書候也

御藏は〇職御藏額間灯械掌灯設之庭燎二个所設火

炬師燒一个所ハ南殿巽角例春御修法一个所ハ

南殿坤角橘木ノ西南殿坤角壇上南ヨリ

戌刻頃被始奉行并脂燭殿上人五人四位二人五位一人

月華門入南殿西階昇見合被居也予以下月華門南

脇出居候テ揃候段奉行へ届宮諸大夫間階脂燭ヨリ御

付西階持昇殿上人へ渡置也

宮諸大夫間ノ階ヲ御下殿取前華門外迄ハ雜色松階

脂迄ハ物承仕體テ前者二人如一月華門入給西階御昇經南簀

子坊取官御給殿奉上行并脂燭行水香臺ニテシヤ水間奉行額

人ノ下西面座殿上畢額間入給殿上人五人此後退西降

夫月間華門出入諸大次衆僧廿口日華門入東階昇テ經簀

子シヤ水畢額間各入此後承仕體之者燭臺クロヲソ

數本額間持入畢白幕絞解幕垂此後奉行起座西階

入間也二始終坊官侍法師額間簀子二圓座敷東面座也

略中宮七今日諸大夫間二御止宿略中神嘉殿四方二繩

張紙手付有之也內侍所西南如春御修法繩張候テ

紙手付有之也略下

